

## 2005 International Congress on Advances in Nuclear Power Plants 参加報告

期日：平成 17 年 5 月 15 日～5 月 19 日

出張者：原子核工学専攻 博士後期課程 3 年 三浦照光

出張先： Grand Inter Continental Seoul Hotel 韓国

韓国ソウル市で開催された『2005 International Congress on Advances in Nuclear Power Plants (ICAPP2005)』に出席し、1 件の研究発表を行った。ICAPP2005 は 15 日の Welcome Reception と 19 日の Post Tour を除き、会議自体は 16～18 日の 3 日間で行なわれた。

会議は、招待講演者らによる Preliminary セッションと個人発表の Technical セッションから成り、私の発表は 16 日午後から始まる最初の Technical セッションに予定されていた。

16 日午前は Opening Ceremony と Preliminary セッションに当てられており、各国の原子力開発状況などの発表が 6 件なされた(図 1)。多くの参加者が来場し、会議全体での参加者総数は数百人規模であったと思われる。

16 日午後からは 12 の Technical セッションが併催され、私の発表する『鉛合金冷却高速炉セッションその 1』では、私や私の指導教員を含めて 6 件の発表が行なわれた(図 2)。本セッションでは鉛ビスマス冷却炉におけるポロニウム汚染問題に関する発表が 3 件あり、鉛ビスマスやポロニウム研究の第一人者らが数多く出席した。私の発表内容は、ステンレス板表面のポロニウム汚染に対するベーキング法による除染実験と Langmuir 方程式を利用したポロニウム蒸発率の計算と化学形態の特定であった(図 3)。



図 1 Opening Ceremony 開始前の会場



図 2 Technical Session 会場 (Lotus Room)

私は今までに国際会議やシンポジウムに 4 回出席したが、それらの会議では学生用のセッションが一般のセッションとは別枠で用意されており、一般の研究者らが学生セッションの聴講に訪れる事は少なかった。その為、今回のような一般の研究者ら、それもポロニウム研究の第一人者らが聴衆として数多

く出席した場での発表は、私にとってはとても新鮮であった。

私はいつも、発表を行なう際には自分なりの目標を設けるようにしている。今回の目標は、事前の練習量を少なくし、発表本番においてスライドを見ながら話す事を考え、少ない言葉でゆっくりと的確に話す事を目標とした。

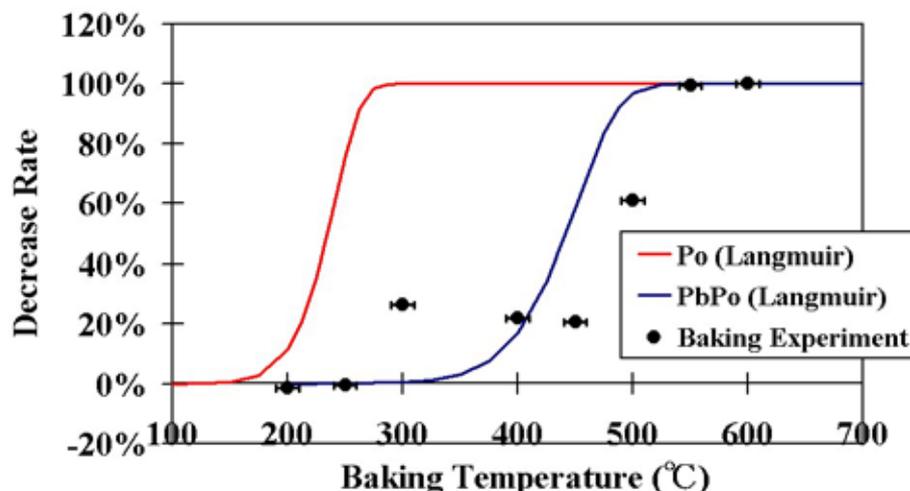


図3 ポロニウムの減少率とベーキング実験結果

これは、瞬発的な英語能力を身に付ける事と聴講者の負担を低減する事を目的としたものである。今までは発表中の台詞を全て覚えてしまうくらいに10回、20回と練習していたのだが、台詞を覚えてしまう事は台詞を記した紙面を読みながら発表しているのと同じであり、楽ではあるが、瞬発的な英語能力を身に付ける上ではあまり役に立たない。発表後の質疑応答などではいかなる英単語を使用する事になるか事前には分からないので、とっさに使える瞬発的な英語能力の育成が重要である。また、発表内容を絞らず、長時間だらだらと話す事は聴講者の大きな負担となる。聴講者の集中力は限られており、的確に手短かに話す事が重要になる。

発表の際にはこれらの事に留意しつつ、ゆっくりと手短かに話した。COE-INES 教育コースの一つである COE-INES プレゼンテーション・スキルで習った、聴衆を常に自分の視野に収め、聴衆の反応を見ながら発表内容を調節する事はまだ出来なかったのも、次回の発表ではそれを目標にしたいと思う。

課題はまだあるが、今回の発表は問題なく終える事が出来た。続く、聴講者よりの質問及びコメントは、MIT の Buongiorno 博士より頂いた。氏はポロニウムの水素化物の生成に関する論文を書いており、私はその論文を10回は読み返していたので氏の事は良く知っていた。氏は、今回の発表内容とは別の、私が行なっているポロニウム水素化物に関する実験の進展状況を尋ねたのだが、私は氏の英語を聞き取る事が出来ずに誤った受け答えをしてしまった。氏の質問には指導教員が代わりに答えてくださったが、それ以降、聴講者らは指導教員に直接質問するようになってしまった。英語聞き取り能力が不十分だと、如何に発表が上手に出来たとしても意味が無い。聴講者の多くがポロニウム問題に高い関心を寄せており、我々のポロニウム実験に関して活発な意見交換が行なわれた。第一線で活躍する研究者達から、今後の研究方針や実験の進め方を考える際に参考になる幾つものコメントを得る事が出来た。惜しむらくは、私の英語聞き取り能力の不足から、その意見交換に私は何の寄与も出来なかった事である。発表者の立ち位置で一人立席したまま、私は司会の Toshinsky 教授と目を合わせては苦笑いなどをする始末であった。

過去に出席した国際会議では、聴講者は少なく、質問やコメントをいただく事があってもそれは日本人からである事が多かったのも、英語での質疑応答にはあまり不自由しなかった。今回の発表における失態は、私の英語に対する無用心さを露呈させた。普段から所属研究室の外国人留学生とは支障無く話せているので、ネイティブの発音に対しても何とか出来るだろうと思っていたのだが、実際、ネイティブに近い発音にさえ対応出来なかった。

今回の ICAPP2005 では、英語に関してまだまだ未熟である事を思い知らされた。ポロニウム研究の第一人者らの前で思わぬ失態を演じてしまったが、この次の国際会議ではこの汚名を返上出来るように、英語の聞き取り能力を向上させてがんばりたいと思う。

## **謝辞**

第一線で活躍する研究者達の前で発表する機会とポロニウム研究者らからの貴重なコメントを得る事が出来た本国際会議への参加を支援していただき、COE-INES プログラムに真に感謝致します。